

地域と協同の研究センター NEWS

2025年6月25日発行
250号

消費者の協同からケアの協同へ～協同組合運動の歴史的転換点にたって～



2025年5月17日、地域と協同の研究センター第25回総会記念企画として、広島大学名誉教授である田中秀樹さんをお招きして講演と意見交換をしました。田中さんは愛知県安城市出身、「協同の再発見」や「消費者の生協からの転換」などの著書があります。

地域と協同の研究センター30周年、国際協同組合年の年に、私たち自身が地域の主体者として、協同の取り組みに着目したり、それを学び、発信したり、ときには自分たちができることをはじめましょうと提起した新しい中計の始まりにふさわしい記念企画をと、講演をお願いしました。

以下に、専務理事として、お聞きした講演のポイントをまとめさせていただきました。また、感じたことを、枠組みで書かせていただきました。

ケアとは何か

ケアとは辞書を引けば「配慮」「注意」「世話」とか出てきます。田中さんがいわれるケアの協同とは何か、それを探りながらお聞きしました。

生協や農協は商品を介した事業を通して大きくなり、「大きな協同」という存在になった。一方、地域では福祉や教育、労働にかかわる小さな協同が生まれていて、その小さな協同は、暮らしを守るために生まれてきている。人間の生命にかかわる協同なので、ケア、配慮を伴う協同となる。そして、小さな協同の主体は人間、それも高齢者や低賃金の労働者、障がい者などが協同し、労働者協同組合などが生まれている、と話されました。

滑り台社会へと社会システムが変わった

なぜ、小さな協同が生まれてきているのか。背景に日本型雇用が解体されて、不安定雇用が増えたことがある。総中流社会から滑り台社会、一層競争が浸透する社会、上級国民とか、下流老人とかの言葉があるように、社会から零れ落ちないようにがんばり続けているが、何らかのケアが必要な社会になっている。

そんな社会に変わっているというのは、実感しているのではないのでしょうか。

あふれる商品が社会関係をうばっている

「北の国から」のドラマの五郎さんをご存じだろうか。五郎さんは貧乏だけど貧困じゃない、貧乏だけどいろんな人間関係をたくさん持っているから貧困ではない。その人間関係が薄れてきて、若者など居場所がない。それは便利な商品が浸透すればするほど加速していく。スマホもそうだし、個別化していく。家電が全部やってくれる。献立もどんどん個別になっている。商品があふれることによって、協同が衰退し、一人で生きないといけな社会に。それは生きづらい社会であり、高齢化社会、単身世帯の増加が加速させている。だからケアが大事。

私も北海道で「北の国から」の富良野に行ったことがあります。家を立てるのも、暮らしを営むのも、いろんな人がかわりあって、成り立つ暮らしがあるんだと思いました。こまい

弱さを基点に社会を作り直す

もっと生きやすい社会になる

弱さの力という言葉がある。強さは人を結集しないが、弱さには人を結びつける力がある。弱さを寄せ合ったとき、人はつながり助け合いが始まる。今の社会はそういうことを求めている時代、転換点にあって、ケアの協同で作っていく時代ではないか。

地域と協同の研究センターNEWS				
3日(火) 協同組合研究組織交流会 名城大学法学部「ボランティア入門⑨」 6日(金) 中京大学「ボランティア⑧」 8日(日) サードセクター研究会 10日(火) 名城大学法学部「ボランティア入門⑩」 13日(金) 中京大学「ボランティア⑨」 17日(火) 名城大学法学部「ボランティア入門⑪」				
20日(金) 中京大学「ボランティア⑩」 三河地域懇談会世話人会 21日(土) 協同組合のアイデンティティ連続セミナー第一回 24日(火) 名城大学法学部「ボランティア入門⑫」 地域福祉を支える市民協同フォーラム 27日(金) 中京大学「ボランティア⑪」				
目次	消費者の協同からケアの協同へ ～協同組合の歴史的転換点にたって～ ウクライナ関連	1	情報クリップ	6
		5	書籍紹介「市民エネルギーと地域主権」	8

協同組合は時代の子

協同組合はいつ始まったのか。商品経済がどんどん普及して没落する人が増える中で、江戸時代、18世紀に無尽講や頼母子講が急増した。二宮尊徳が小田原藩で報徳社をはじめ、大原幽学は子孫英々相続講というのを始める。これは封建制を維持するものという通説はあるが、たとえば無担保無利子で貸し付けるのは主体性意欲を引き出すためのものであり、禁欲的なスタイルを確立しながら民衆と一生懸命助け合ったとうのは、先駆的な協同組合であり、民衆の実践として発展してきたと捉えるべきだと思う。

なぜ、江戸時代末期か、その背景をもっと探らないとわからないと思います。商品があふれ、博打や飲酒に流れられていく人が増える中、民衆が自ら協同して行ったという歴史は、歴史の本にはあまり出てきませんが、その歴史から新しい時代に必要なることを学ぶのは大切だと思いました。こまい

北海道の生協の歴史からわかること

最初に、鉄道関係が北海道で伸びた時に、鉄道の工員を中心に「共働店」ができた。でも、それは治安維持法のもと弾圧されつぶされる。1930年代に入ると消費組合がたくさんできる。これは米よこせ運動の一環でできた。戦後になると、勤労者生協ができる。統制経済のもと食料を確保するため。統制経済が終わるとなくなる。1950年代から炭鉱生協が次々とできる。炭鉱が閉鎖されると地域化して、夕張市民生協などになった。今のコープさっぽろは、旭川市民、札幌市民、小樽市民の3つの生協が合併し、それがさらなる合併とともにどんどん大きくなった。

このお話は、協同組合は「時代の子」を象徴するお話として聞きました。そういえば、夕張の炭鉱を舞台にする「幸福の黄色いハンカチ」で高倉健と倍賞千恵子が出会ったのは生協の店で、かつて嬉しく感じた思い出があります。こまい

スウェーデン、北欧と比べて

北欧は農村の生協が強い。農民の性格が日本とは違う。土地を持っている自由農民が封建時代から多い。スウェーデンも自由な農民が多い。パイキングの伝統で、税金は払うが自分で土地を持つ自由な農民が圧倒的に多く、リベラル派がひじょうに強かった。農村のコープストアは、その拠点だった。そこ都市の労働者の運動が一緒になって福祉国家をスウェーデンは作り上げた。1932年に赤緑連合ができて以降、社民党の力が強い。日本とは農民の性格が違ったというのが大きい。貴族や王様に対抗するリベラルな動きが強かった。もう一つは日本にはギルドの伝統がなかった。西欧ではギルドは自由都市、商人手工業者たちの自治都市をつくり、封建領主は都市ではなく農村にいる。日本の封建領主は兵農分離で城下町をつくり、職人と共に都市にいる。

市場を社会に埋め戻さないといけない

今、市場は局地的な市場から、全国統一市場、グローバル市場となっている。市場を社会に埋め戻さないといけない。そういう芽が生まれてきている。村落の共同体もなくなってきている。団地があらわれる中で、団地の中で協同も生まれたが、高齢化で厳しくなってきた。その中で、新しい労働者による協同組合が生まれてきている。

これまでの協同のよりどころである、農協で言えば農村、生協では団地などのつながりは崩れてきていると私も実感しています。その中で田中さんは労働者協同組合や新しい農業法人が生まれ広がりつつあり、それが小さな協同として紹介されていると思いました。そこで出された、市場を社会に埋め戻すという言葉。どんどん私たちの実感と遠いところで、市場は動いている気がしていましたが、もっと実態のある社会課題、地域課題とつながる市場にしていけないといけないと受け止めました。こまい

3つの課題提起

一つは大きな協同のまわりに小さな協同を作ること。これは、大きな協同組合と小さな協同組合の協同の課題。大きな協同組合の内部や周辺に小さな協同を作ること、大きな協同組合における協同が再生される可能性が出てくる。どんどん周りに作っていくことは大事な課題。

一つは小さな協同組合間の協同を組織すること。日本でいうと、労働者協同組合のセンター事業団も中間支援組織だと思う。ワーカーズコレクティブジャパンもそうだと思う。小さな協同組合の設立を支援し育てる、連合会的な支援組織を作れば大きな役割を発揮すると思う。

一つは大きな協同組合は、その中で地域の協同のセンター的な意味を持ってくるではないか。小さな協同組合がたくさんできると、大きな協同組合の新たな役割が生まれる。支援センターでもあるし、情報がある、包摂的な位置にある。

生協も大きくなって、組合員の暮らしを守り続ける、利用し続けられる組織としての責任を負っていると思いました。今はコープのほうと呼ばれる割合が増えてきましたが、かつては小さな生協、協同の場として、子どもの健康や食の安全、家族のくらし、平和の問題も班で議論されていました。今は、大きくなって、幅広い事業課題に向き合う運営になっています。高齢化もあるし、就業率も高い中、かつての班のようなものの復活はむづかしい中、社会課題に向き合う人たちを応援していくことが、これからの使命なのではないと感じました。また小さな協同も、持続可能、自立を課題にして、相互に助け合い協力していく関係が大事だと思いました。こまい

会場から多くの発言がありました(概要)

田辺準也さん

班の活動はある意味、ケアの協同だったのではないかと思います。子育てや困難をかかえる中で家事の協同というか、そういうスタイルにしようとしたのが班だと思う。その班が今うまくいなくなってきたいて、考えを聞かせてほしい。



入川哲夫さん

アソシエーション。言葉の使い方、意味合い、協同組合との関係を詳しく願います。



棕木真佐子さん

学生になった気分で聞かせていただきました。私はふだんから研究センターにかかわってきました。協同→協働→共同になっていく意味について説明してほしい。



安藤信雄さん

今年3月大学を定年した教員。今までの社会は生産と消費が一体となったフォーディズムで作られきたが、先生のおっしゃったように個人的にばら



けてきて、非正規が増え、フォーディズムそのものが崩壊していく。個人が崩壊していく。崩壊した以降の新しい社会があるんだと思うが、そのへんがわからない。それが埋め戻すということか。詳しく教えてほしい。

藤井恵里さん

ワーカーズコープからきました。大きな協同への期待として、主体形成は大きな協同の重要な役割。組合員主権、組合員がちゃんと扱われる運営をすることで、主体が生まれ、小さな協同を作っていくという流れを脈々と作っていく。



石原光朗さん

南医療生協で非常勤理事をしていた。生活協同組合という名前、生活の協同なんだと。これをなぞりにして大資本と戦って、大きな店舗を作ることが目的になると負けだと思ふ。生活をとらえなおし、生活で協同して行くようにしないといけない。



原 勝行さん

地域の中でサロンを作るとか、組合員のつながりをメインにしたつながりを作っていくことが生協の課題じゃないか。



(文責 専務理事 駒井義明)

第25回通常総会で決まったことと、意見、発言の受け止め

2025年5月17日、第25回通常総会。森代表理事の挨拶では、協同組合の振興にかかわる決議がされるなど紹介がありました。

そして、2025年度から4年間の第6期中期計画と2025年度事業計画が決まったことを、研究センターNEWSの先月号でお知らせしました。長い間、研究センターの活動に尽力していただいた、コープみえの妹尾さん、渡辺事務局長の交代もお知らせしました。新しく、常任理事に選出された田中浩さん、石橋一郎さんの紹介は、おいおいとさせていただきます。



引き続き中計は4つの柱に基づいてすすめていきましょう。特に持続可能な組織となるよう、会員主体で、3生協を含めて協同組合のみなさんとの絆を大切にしていきたいと思ひます。また、わかりやすさや、参加しやすい場づくりは基本的課題として気をつけていきます。2025年度事業計画には、国際協同組合年、被爆戦後80年、研究センター30周年ということから、特別事業を位置づけました。

沖縄の過去、現在から未来へのメッセージを、3生協、大学生協、医療生協の職員に参加して、まとめてもらいます。10月に結団式を行い、来年2月21日(土)

には大報告会を本山で行う予定です。ぜひ、ご参加ください。ホームページも動画などが見やすいようリニューアルします。

発言(略掲載)を受け止めて

奥田智子さん

会員として入会のお声がけをしてくださいねというのもあるんですが、声をかけて、入ってもらって、お誘いしてよかったなと思うような状況、場づくりは真剣に検討していただきたいと思ひます。



それから、理事の構成。6名は各生協からの組合員理事ですね。この人たちが任期を終えた時に、賛助会員として残るんだろうかと、この状況がこれでいいのかと思ひているのか伺いたい。

福井千代子さん

岐阜の地域懇談会の世話人会での意見。とにかくお米騒動、お米の価格の高騰の現状を知らないといけないのが1点。中津川の介護施設が利用者に寄り添った運営をされているが、物価高の中でどのような運営をされているのか、また、コロナ



禍を振り返ってどうされていたのか伺いに行きたい。
※福井さんからは、マイスタコースでの職員の成長ぶりや理事を退任された方が継続して岐阜地域懇談会の世話人会をされていることなど紹介をいただきました。

宮本季余美さん

コープあいち組合員理事3期目になるが、理事として1期終わった時に、理事として体系的に学ぶ場が足りないと感じている。地域区の理事がいきいきと協同組合の学びをしながら役割を果たしていくために研究センターはどのような力を注いでくれるのか教えてほしい。



八木憲一郎さん

役職員や若者、学生などの学びを広げ深めていただきたい。協同の未来塾も10年になるので、よりきめ細かく、目標をはっきりさせてすすめていくこと、ていねいにやっていただきたい。また、昨年の地域のシンポジウムのようなことを続けられるよう、研究センターには助言や応援を期待している。



橋本吉広さん

困難を持った子どもたちの学習支援は小さな協同の活動でもあり、強くやっていけないといけない。生協とも連携できるよう呼びかけたい。組合員活動研究の方針が出ているが、地域の中で6月に場を設けたい。3つ目は全国の生協は知恵があるので、学んで活動に取り込んでほしい。



大宮克美さん

しぼんでいる組合員活動をどのように地域から活性化させていくのか課題。研究の中身について聞きたい。



専務理事として受け止めたこと 駒井義明

書面出席の会員の意見にもありましたが、今、ひじょうに食と農、物価高など生活に直結する問題について関心が高い状況です。コープあいちの組合員アンケートでも、物価高や食と農の問題については不安や関心が高いものがありました。地域と協同の研究センターの知恵を集め、場を作り、発信できるようにしたいと思います。地域懇談会でも、関連した場づくりが検討されており、連携しながらと思います。



会員の減少については、参加してよかった、加入してよかったという場づくりや発信をていねいにすすめていくことで変化を作りたいと思います。いろいろなつながりを生かしてアピールにも伺いたいと思います。

女性の役員については、来年度に改選がありますので、これも変化につなげられるよう努力していきます。また、退任した団体会員の理事さんが継続して活動に参加したくなるようにもしたいといつも思っています。

今年は特別事業もあり、学びの場の再構築と多くの課題設定をしています。その中で機会を生かし組合員活動の現状について、つかみ発信することから始めたいと思います。組合員活動の定義も考えないといけません。協同組合の周辺や内部化している「小さな協同」の活動にも視点をあてて発信したいと思います。

(文責 専務理事 駒井義明)



コープぎふ、コープあいち、コープみえの総代会に参加して

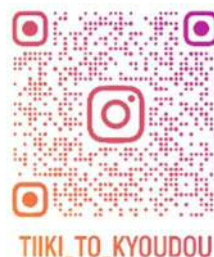
2025年6月9日、10日に、コープぎふ、コープあいち、コープみえの総代会が開催されました。被爆戦後80年、国際協同組合年が強調され、平和の願いが多く出された印象的な総代会でした。



6/9 コープぎふ総代会

6/9 コープみえ総代会

6/10 コープあいち総代会



TIKI_TO_KYODOU

インスタに
アップしています

支援から共生へ、食料提供から対話へ ― 難民と共に学び語る場の継続と実践

神田すみれ（地域と協同の研究センター研究員）

2025年5月24日、第13回「難民食料支援 学び語り合う会」を開催しました。名古屋会場（生協生活文化会館）と豊橋会場（豊橋生協会館）をオンラインで接続し、難民当事者9名（名古屋4名、豊橋5名）、大学生4名を含む35名が参加しました。

冒頭、遠藤さん（アジアボランティアネットワーク東海）より開会の挨拶があり、続いてNPO法人名古屋難民支援室の羽田野さんから、これまでの活動の経過報告がありました。続いて、難民当事者2名から、「これまでの参加を通じて感じたこと」をそれぞれの言葉で語られました。日本へ逃れてきた経験や、日本語を学びながら就労の課題に向き合ってきた過程が共有され、会場の空気が一気に引き締まる時間となりました。

その後、名古屋会場からは、高桑さんから「難民家族への同行支援」の報告がありました。報告では、来日まもない子どもたちにとって、公共交通機関での外出が初めてだったこと、支援物資を与えることとは異なる「自ら選び購入する」経験を支える重要性、さらに職場や学校と連絡をとり家庭外の状況を把握する取り組みなど、具体的な関わりの中で見えてきた支援のあり方が共有されました。

これらの報告を受け、豊橋会場と名古屋会場に分かれて1時間の交流時間を設けました。各テーブルには「災害食」としてパンの缶詰が配られ、和やかでありながらも深い対話が交わされました。ときには笑いも生まれ、言葉の壁を越えた交流が広がりました。通訳を通じて紹介された難民の声は印象的でした。

「日本語が難しく、キャリアを活かせない」「将来が見えず不安」



「それでも子どもの教育を諦めたくない」どれも、共に暮らす隣人の言葉として、深く胸に残りました。

会の最後には、東海コープから難民の方達へ提供された日用雑貨の紹介があり、「モノの支援」もまた、顔の見える関係の中で届けられる大切さを再認識しました。

参加者からは「このような機会がなければ難民の方と直接話すことはなかった」という

感想が複数寄せられており、出会いの場そのものに大きな意義があることがわかります。ある参加者は「東日本大震災の被災者の話と重なる部分があるように思えたが、難民の方々の状況の方がはるかに困難に感じた」と語り、キャリアを持ちながらも日本語の壁によって活かせない現状に「それは日本にとっても大きな損失」と述べたうえで「自分は英語が難しいと学びを諦めたが、彼らは母語でない英語で思いを伝えていた。自分も学び直したい」と言語の壁に挑む姿勢に感銘を受けたと話しています。別の参加者は「自分がなぜ難民になっているのか、いまだにミステリーだ」と語った難民の言葉から、「キャリアや尊厳を失い、アイデンティティの喪失と向き合うその姿に心を打たれた」と振り返ります。「日本は安全で人が優しいと言われたが、本当にそうなのか、日本人として自問した」という言葉も印象的でした。

また、「難民という立場にある人の多様な背景を直接聞ける場がいかに重要かを実感した」との声や「誰も自ら望んで難民になったわけではない」という言葉に胸を突かれたという感想もありました。語られなかったことの背景や、参加できない人々の存在にも思いを馳せながら「自分たちにできる支援とは何か」を考えるきっかけになったとの声が寄せられました。

これらの感想は、単なる一過性の支援ではなく、難民とともに考え、支え合いながら共に社会をつくっていく必要性を、多くの参加者が深く受け止めたことを物語っています。

今後の展望として「支援から共生へ」「物資提供から対話へ」という転換をいかに実践していくかが問われます。多くの感想からは、難民とホスト社会の双方にとって「学び語り合う場」の継続が必要であるという共通認識がうかがえました。「日本社会が難民の力を必要としている」「文化・言語の違いは壁ではなく可能性である」——今回聞かれたこれらの声を大切にして、今後の活動をつなげていきたいと考えます。

次回は7月6日（日）に食料品の仕分け・発送作業を予定しています。支援物資がただ届くのではなく「誰が・どんな思いで・どのように」準備しているかを感じられるような作業にしていきたいと思っています。さらなる実践と連帯の歩みを進めていきたいと思えます。添付のご案内チラシをご参照の上、ぜひご参加ください。（かんだ すみれ）

情報クリップ

co・opnavi 2025. 6 No. 877

高齢者の思いや困り事に寄り添う生協の終活支援

日本生活協同組合連合会 2025 年 6 月 A4判 32 頁 363 円 (消費税込)

＜私たちの「この一枚」＞ いばらきコープ
災害が発生したらすぐできることを決め、率先して行動する

執行役員 政策推進担当 兼 総合企画室室長 松尾 掌

特集

高齢者の思いや困り事に寄り添う生協の終活支援

＜今日も笑顔のコープさん＞ 生協しまね

＜想いをかたちに コープ商品＞

CO・OP3 素材にこだわった小魚おかか

＜生協大好きママコブ山さんの 教えて! CO・OP 商品＞

CO・OP 塩だけの切り身

＜2025 国際協同組合年＞

(ICY2025) を知る

＜組合員に支持される店づくり・売場づくり＞

生協コープかごしま

＜日本全国宅配現場におじゃまします＞ こうち生協

＜本田よう一のいつもの台所＞

＜生協のDE&I 多様性のある職場をつくろう＞

大阪いずみ市民生協 (株) いずみエコロジーファーム

＜この人に聞きたい＞

珠洲市特定地域づくり事業協同組合 馬場千遥さん

＜ほっと navi＞ コープやまぐち / 鳥取県生協

生活協同組合研究 2025. 6 VOL. 593

エシカル消費の現在地

公益財団法人 生協総合研究所 2025 年 6 月 B5判 68 頁 定価 550 円 (消費税込)

巻頭言

自社株買いと資本主義の変質 小栗崇資

特集 エシカル消費の現在地

エシカル消費 ―その拡大と深化― 渡辺龍也

持続可能なエシカル消費に向けて

―エシカル消費における消費者の購買要因とその課題―

玉置 了

おいしさと節約からはじまる持続可能な食消費の実践

―生活者の行動とその動機に注目して― 地頭所裕美

欧州におけるエシカル消費の取り組みについて 西田隆章

CO-OP 商品におけるエシカル消費対応に関する戦略や方針

宮田 智

■IYC2025 の機会に協同組合の価値を再考する (第3回)
コープ・ロンパルディアの自閉症に優しい店舗づくり
三浦一浩

■国際協同組合運動史 (第39回)

1963 年第22 回ボーンマス ICA 大会① 鈴木 岳

■本誌特集を読んで (2025・4) 竹内広人・吉中由紀

●公開研究会

生協による市民活動支援の現状と課題 (6/27)

●生協総研賞「第23 回助成事業」の応募要領 (抄)

文化連情報 2025. 6 No. 567

民主的な薬価制度の確立を

日本文化厚生農業協同組合連合会 2025 年 6 月 B5判 72 頁 文化連情報編集部 03-3370-2529 *注

農協組合長インタビュー (104) 佐久浅間農協

先を見据えた攻めの経営戦略で強い農業を 高柳利道
薬価制度、医薬品流通の現状と問題点 (1)

民主的な薬価制度の確立を 佐治 実

医療材料・医薬品全国共同購入委員会臨時総会を開催

新年度を迎え、積極的な取り組みを確認

院長インタビュー (357) 遠州病院

地域密着の病院として、高齢者救急に重点化した病

棟・スタッフ体制へ 大石 強

戦後80年 紡がれた平和への祈り (2)

武力に頼らない平和を求めて ダニー・ネフセタイ

基本計画で食料・農業・農村の

持続可能性は高まるか (下)

田代洋一

協同精神のリレー (27)

JA 交流事業という協同

伊藤澄一

二木教授の医療時評 (232)

自公維三党合意が「念頭に置く」国民医療費の「最

低4 兆円削減」が荒唐無稽である理由 二木 立

農高生と地域を作る

～我はいかにして農業高校教員となりしか～ (5)

初任校で農業教育の原点を培う 橋本 智

食べ物から考える <共 コモン>の仕組み (最終回)

食や農の取引はどうあるべきか 平賀 緑

「医工連携」が拓く医療技術イノベーション (11)
 科学的根拠の提示は、
 新医療機器開発には必要なプロセス 梅津光生
 多様な福祉レジームと海外人材 (82)
 福祉国家から安全保障国家への転換 安里和晃
 デンマーク&世界の地域居住 (191)
 地域コミュニティづくりを進めるウエルシア薬局の
 「ウエルカフェ」と移動販売「うえたん号」
 松岡洋子

■書籍紹介
 今年からは手作り派 やさしい梅しごと
 ▶線路は続く (197)
 北東北の大幹線 青い森鉄道 / 西出健史
 ▶最近見た映画
 サブスタンス / 菅原育子

にじ 2025 年 春号 No. 691

大学生と協同組合

一般社団法人日本協同組合連携機構 2025 年 B5 判 78 頁 1,100 円 (税込)

オピニオン

○若者と協同組合との接点を増やそう
 伊藤治郎 (日本協同組合連携機構 常務理事)

特集企画 大学生と協同組合

○大学生と協同組合の関わり の 現段階
 加賀美太記 (阪南大学 教授)
 ○JA あつぎと大学生による地域に根差した協育活動
 -協力して育てる協働することで自分を育てる-
 落合恵美子 (JA あつぎ組織文化部 次長)
 ○学生たちに「協同」を伝える
 一つながりインターンシップの取り組みと意義-
 中根康子 (一般社団法人くらしサポート・ウィズ 事務局長)
 久保ゆりえ (インターンシップ担当事務局)
 ○大学生協における大学生の組合員活動と運営参加
 -広島大学生協を事例として-
 岩崎真之介 (日本協同組合連携機構 主任研究員)

協同組合の地域共生フォーラム

災害をめぐる協同組合の役割と連携のチカラ

○開催概要報告
 ○イントロダクション
 浅田克己 (日本生活協同組合連合会 元会長)
 ○事例報告 1 能登半島地震における
 災害派遣医療チーム (DMAT) の活動報告と教訓・課題
 石黒秀典 (愛知県厚生農業協同組合連合会
 江南厚生病院 施設課施設係長)

○事例報告 2 平時からの「災害支援団体のネットワー
 クづくり」と 2019 年台風 19 号災害時の取り組み
 中谷隆秀 (長野県生活協同組合連合会 事務局長)
 ○事例報告 3 住民の力と地域のつながりを大切に
 した、被災地での仕事づくり・まちづくり
 大久保千絵美 (労働者協同組合 労協センター事業団
 南東北事業本部 互理事業所 ともにま道所長)
 ○事例報告 4 震災復興と市町村との包括連携協定
 による持続可能な地域づくり
 吉田雅俊 (ふくしま未来農業協同組合 営農経済部
 営農経済企画課 営農経済企画係 兼 復興対策担当)
 ○浅田氏と事例報告者の質疑応答
 コーディネート: 浅田克己
 事例報告者: 石黒秀典、中谷隆秀、大久保千絵美、
 吉田雅俊

○事例報告等のまとめ

比嘉政浩 (日本協同組合連携機構 代表理事専務)

ヨーロッパの食料・農業・環境協同組合シリーズ第 63 回

○スウェーデンの高齢者福祉行政の現場から
 -学校給食を活用した高齢者サービス-
 和泉真理 (日本協同組合連携機構 客員研究員)
 編集後記
 岩崎真之介 (日本協同組合連携機構 主任研究員)

地域・協同の運動、協同組合に関する文献資料、協同組合・生協関係の研究などの調査研究成果や研究センター会員の研究成果などから、比較的入手しやすいと思われるもの、寄贈いただいたもの(※)などを中心に順不同で紹介しています(主な内容は目次等から事務局が要約しています)。詳細は研究センター事務局までお問い合わせください。

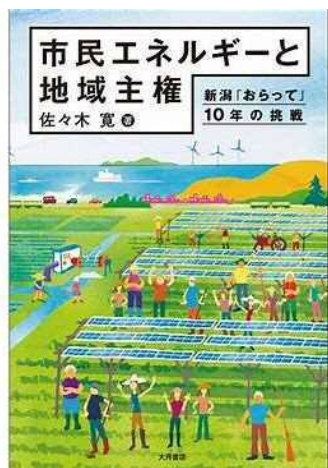
書籍紹介

地域と協同の研究センター駒井専務理事からの書籍紹介

市民エネルギーと地域主権 新潟「おらって」10年の挑戦

著者:佐々木 寛 発行所:大月書店 発行日:2024年6月

価格:1980円(税込) 単行本(ソフトカバー): 192 ページ



佐々木寛さんのことは何も知りませんでした。名城大学で行われた東海自治体学校の全体講演でお話を聞いて面白いと思った。佐々木さんは新潟国際情報大学というご本人いわく、小さな大学の教授。新潟には世界最大の原発柏崎刈羽原発があり、東日本大震災を契機に、「おらって」を新潟に立ち上げ、市民に電力と権力を取り戻す運動を広げられている。新潟の野党共闘にも尽力をされた。

「あきらめ」、「今だけ、カネだけ、自分だけ」という風潮がある。ガザの虐殺など自分でできることはないと思ってしまふ。ウクライナ軍事侵攻では、原発が攻撃対象にされた。危機が増幅しているが、危機はチャンスでもあると佐々木さんは言う。おらっての取り組みには、エネルギーの自治を掲げ多くの若い人が参加している。佐々木さんの大学の授業では、講義を聞くのではなく、学生は出かけて行って自ら講義する立場にしたら、目の色が変わったという。これは実践の本であり、新潟に勉強に行かせてくださいと言って本にサインをもらいました。

<「Instagram」 鋭意アップ中!>

研究センターのとりくみを広く知っていただくために、SNSの「Instagram」を始めました（フェイスブックも継続中）。研究センターの取り組みや研究センター事務局が訪問したとりくみをアップしています！ぜひフォローを！



<研究センターNEWSへのご意見募集>

会員のみなさんに役立つニュース、紙面で交流ができるニュースにするために、会員のみなさんからご意見を募集しています。また掲載する記事や書籍紹介も歓迎です。右のQRコードからお寄せください。記事を掲載させていただいた方には、国際協同組合年記念グッズ（クリアファイル・バッジなど）を進呈いたします。



研究センター 7月活動の計画

- 1日(火) 常任理事会、名城大学法学部「ボランティア入門⑬」
- 3日(木) 第1回協同の未来塾
- 4日(金) 中京大学「ボランティア⑫」
- 7日(月) 三重地域懇談会
- 8日(火) 名城大学法学部「ボランティア入門⑭」
- 9日(水) 生協の未来のあり方研究会
- 10日(木) 組合員理事ゼミナール
- 11日(金) 中京大学「ボランティア⑬」
- 12日(土) 東海交流フォーラム実行委員会、理事会
- 14日(月) 国際協同組合デー in 愛知
- 15日(火) 名城大学法学部「ボランティア入門⑮」
- 18日(金) 労働者協同組合トークイベント、中京大学「ボランティア⑭」
- 19日(土) 第1回マイスターコース
- 25日(金) 中京大学「ボランティア⑮」
- 26日(土) とうかい食農健サポートクラブ総会記念企画
- 29日(火) 三河地域懇談会

※企画は様々な事情で中止・延期・オンライン参加のみとなることがあります。

参加の前にホームページ等でご確認ください。

地域と協同の研究センター

Facebook

下記QRコードでご覧ください。

Facebook QRコード



地域と協同の研究センター

ホームページ

下記QRコードでご覧ください。

ホームページQRコード

